古代チベット帝国の中央アジア支配とオアシス諸都市の社会変容

岩　尾　一　史
神戸市外国語大学　客員研究員

緒　　言

本研究の目的は、8～9世紀、古代チベット帝国（吐蕃）が支配した中央アジア諸オアシス都市の社会変容の一端を明らかにすることである。帝国の一部に組み込まれたシルクロード南道・河西回廊沿いの諸オアシス都市の社会はチベットによって大きく変容し、その変容の実像は十分に明確にされていない。従来十分に利用されなかった中央アジア出土古チベット語・漢語文書を利用し、異文化接触、文化変容の実像を新たに提示しようと試みる。

本研究では、古代チベット帝国の支配下に入った中央アジア諸都市のうち、資料が最も豊富な敦煌を考察の対象に選んだ。敦煌がチベットの支配下に入ったのは、786年から848年の約60年間である。その間にチベット語が敦煌漢人に浸透し、契約をチベット語で交わし、またチベット風の名前をつけるものも現れた（Takeuchi 1995）。かかる状況のもと、どのような理由で敦煌の漢人がチベット語を使うようになっていったのか、具体的史料に基づいて明らかにする必要がある。当時の行政文書にはチベット語、漢語文書の両方が存在する。それらを収集して分析することによって両言語の使い分けや、チベット語が優位になっていく過程について解明する。

調査の対象・資料・方法

1.「チベット支配下敦煌における役職序列とチベット人・漢人の関係」と、2.「チベット支配下敦煌における漢語・チベット語公文書の使い分け」、という二つの視点から調査を行った。調査対象資料として、イギリスの大英図書館ならびにフランスの国立図書館をはじめとする各国所蔵の敦煌文書のうち、当時公文書として発行されたチベット語・漢語文書を使った。漢語文書、チベット語文書いずれもすでに白黒写真や録文が出版されているが（池田 1979、Macdonald and Imaeda 1978、Spanien and Imaeda 1979など）、今回できるかぎりより鮮明なデジタルカラー写真をInternational Dunhuang Project（http://www.idp.bl.uk）から入手した。

1.「チベット支配下敦煌における役職序列とチベット人・漢人の関係」を考察する際に利用したのが、フランス国立図書館所蔵の敦煌出土チベット語文書Pelliot tibétain 1089（以下、Pelliot tibétainはP.t.と略）である。本文書は河西回廊を統括していた「デカム」の会計局から敦煌に向けて発行された古代チベット帝国の公文書で、敦煌内における役人の役職序列についての論争に結着をつけることを目的としており、そのなかでチベット支配下の敦煌や涼州における役職序列を引用している（Lalou 1955、山口 1981、王・陳 1989、Scherrer-Schaub 2007など）。文中、各地の役職序列リストが引用され、特に敦煌の役人序列については3種類の役職序列リストが引用される。

2.「チベット支配下敦煌における漢語・チベット語公文書の分布」を考察する際、主に利用したのが、漢語の公文書（Pelliot chinois 3613やS.2103など）とチベット語の公文書（P.t.1083、P.t.1085、IOL Tib J 1579など）である。さらに両語の私文書も補助的に利用した。

調査結果

1. チベット支配下敦煌における役職とチベット人・漢人の関係

P.t.1089のテキスト並びに役職序列リストを比較対照した結果、判明したことは次のとおりである。

①敦煌の支配体制は基本的にチベット人—漢人の二重統治体制が敷かれ、一定以上の役職では、チベット人が正官に、漢人が副官についた。例えば、チベット支配期の敦煌文書には、当時の敦煌における行政機構の最高位として、ツェジェ（節児）とトトク（都督）の二官を併記することがしばしばみられるが、P.t.1089によれば、この二官のうちツェジェに就任するのはチベット人であり、一方トトクは必ず漢人が就任する。さらに、P.t.1089に

はトトクがツェジェの補佐であると規定されている。すると、ツェジェとトトクの関係とは、チベット人のツェジェ（正官）−漢人のトトク（副官）と理解できる。同様の関係は、千戸長（チベット人）−千戸長補佐（漢人）や、千戸小長（チベット人）−千戸小長補佐（漢人）、漢人万戸の都護（チベット人）−漢人の都護（漢人）、沙州全体の防衛官（チベット人）−防衛官（漢人）の間にもみえる。
②役職序列のうちで下層に属する役職には、チベット人が現れない。具体的には、収税官以下、営田官や水官などの役職においては、漢人のみが就任している。

2．公文書における漢語・チベット語の使い分け

敦煌出土チベット語・漢語公文書を比較分析した結果、次のような傾向がみてとれた。

・比較的ローカルな事象に関する行政処理においては、公文書に漢語が使用された。その場合、文書を作成するのに、チベット支配以前に使用されていた唐の書式が援用された。
・一定レベル以上の官吏が出した裁判の判決や行政文書ではチベット語文書が使用された。また、上級機関とのやりとりにはチベット語文書が使用された。文書作成にはチベットの書式が使用された。

調査結果の分析

・調査結果１は、敦煌の役人序列のうちで上層部はチベット人が要職を占め、漢人が補佐についた一方、下層部では漢人のみが役職を占めたことを示す。
・調査結果２は、行政機構の下層では漢語が使用された一方で、上層ではチベット語が使用されたことを示す。
・調査結果１、２から類推できることは、チベット支配下の敦煌では、チベット政府によって行政機構が置かれたが、実際には限定された数のチベット人しか敦煌には派遣されず、実務には漢人が当たっていたということである。チベット人は行政機構の上層部にしかおらず、そこで行政機構の上層ではチベット語が使用されていたが、行政機構の下層では漢人の役人で占められ、そこでは漢語が引き続き使用されたのである。

むすび

上述の分析結果は、占領下の敦煌社会において支配者側のチベット人は少数しかおらず、むしろ被支配者側の漢人が圧倒的多数であったことを示している。しかしチベット人は支配機構の上層を占めており、かつチベット語が帝国の共通言語である以上、行政機構の上層と関係を持とうとすれば、チベット語を使わざるをえない。このような社会事情が、敦煌の漢人がこぞってチベット語を使用するに至った要因の一つと考えられる。

今後の課題

今回の調査においては、チベット支配下のオアシス諸都市において最も資料の豊富な敦煌の事情を明らかにすることを重視したため、その他の諸都市の状況と比較検討するにいたらなかった。今後、チベットの支配下に入った河西回廊の諸都市、ミーラーンやコータン、さらにはチベット本土の状況を個別に検討し、チベット帝国全体を俯瞰する必要があるだろう。

謝　辞

本研究の遂行にあたり、公益財団法人三島海雲記念財団より学術奨励金をたまわり、有意義な研究環境をご提供いただきました。末筆ではありますが、篤く感謝申し上げます。

文　献

1) Tsuguhito Takeuchi：*Old Tibetan Contracts from Central Asia*, Daizo shuppan, 1995.
2) 池田温：『中国古代籍帳研究』東京大学出版会 , 1979 年 .
3) Ariane Macdonald and Yoshiro Imaeda：*Choix de documents tibétains conservés à la Bibliothèque nationale*, Tome I, Bibliothèque nationale, 1978.
4) Ariane Spanien and Yoshiro Imaeda：*Choix de documents tibétains conservés à la Bibliothèque nationale*, Tome II, Bibliothèque nationale, 1979.
5) Marcelle Lalou：Revendications des fonctionnaires du Grand Tibet au Ⅷe siècle, *Journal Asiatique* 243, pp.171–212.
6) 山口瑞鳳：沙州漢人による吐蕃二軍団の成立と mKhar tsan 軍団の位置『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』4、pp.13-48、1981 年 .
7) 王堯、陳践：吐蕃職官考信録『中国蔵学』1989–1、pp.102–117、1989 年 .
8) C.Scherrer-Schaub：Revendications et recours hiérarchique：contribution à l'histoire de Śa cu sous administration tibétaine. In Jean-Pierre Drège (ed.), *Études de Dunhuang et Turfan*, Librairie Droz, pp.257-326, 2007.